

シツタンとデヴァナーガリー

小 島 通 正

ここにシツタン (Siddham) とは日本梵語学のこと、デヴァナーガリー (Devanagari) とは西洋梵語学のことを指す

昭和四十二、四十三、四十四年と三ヶ年間に、文部省助成の特定研究「明治、大正、昭和における日本の近代化の研究」——特に日本の近代化と仏教の關係について——というテーマの中で、私は「仏教の科学的研究」という部門を担当し、日本梵語学史上の一例、阿満得聞、得寿という江戸末期から明治、大正、昭和にまたがった西本願寺の勸学父子の梵語学について、シツタンよりデヴァナーガリーへの移行がいとも円滑に行われたかの如く、気軽な気持で発表をした。ところがその後、日本梵語学史の研究を進めている中に、シツタンのもつ宗教性とか、日本梵語学には文法や辞書の文献が不足していたこと、他方西洋梵語学のもつ分析性、科学性、合理性といったことなど少しく分つて来た。しかし率直にいつて私の中にはシツタンとデヴァナーガリーとが併存しているだけで、千年の歴史をもつ日本梵語学のよさ、又、二百年の伝統を持

つ科学性に於て優れている西洋梵語学のよさは十分に理解が出来ていないので恥入る次第である。ところでここに日本の近代化とは一体どのようなことを云うのであろうか。近代化とは機械化、合理化そして西洋化を云うのであろうか。又、仏教の科学的研究というのはどのような研究を指すのか。山口益先生の近代仏教学が仏教の科学的研究というものであるのか。それとも高楠順次郎先生のような言語学的な方法論を科学的というのか。又村上专精、常盤大定先生のような歴史学的方法論を用いて研究されたのを仏教の科学的研究というのか、或は哲学という思想を以て比較思想を研究する、これを科学的研究と規定してよいのか。思うに近代仏教学も仏教の科学的研究も現在の日本印度学仏教学会の研究発表に瞭然と見られていて何ら説明を要せぬのではないかと自問自答してみた。しかし近代仏教学はこれでよいかという問題が残る。それは云うまでもなく研究が進む一方、他方で、宗教が退くという現象である。仏つくつて魂がない現況である。こ

の例があてはまるかどうか分らないが、京都の私の家から竜谷大学へ行く途中、京都国立博物館のところを通るのであるが、その東側に名刹、妙法院と智積院とがある。このお寺の石垣は穴太流の石組で築城にも用いられている。ところが、最近、智積院に金堂が新築され、そのため入口として道路が作られ石垣がとりこわされ、新しい石垣が積まれた。よく見るとそれは石と石とが整然と組まれ其の間に水はけを設け、石と石とはセメントで固められている。穴太流の石垣は一見、無難作に石が積み上げられ、水はけもない。ところが、先日、大雨で水が出てアツという間に現代式の石垣はくずれ落ちました。これに反して穴太式の石垣はピクともしていない。日本梵語学は語学としては、平安中期明覚の「梵字形音義」四巻、以上の發揮は見られないといわれるが、一方、阿字本義に立つて人間覚醒の門を開いたことはすばらしい成果といつて過言ではない。ただインドの西紀前四世紀のパニニー (Pāṇini) のジャーカーラナ (Vyākaraṇa) 文典、八巻やアマラシンハ (Amalasimha) のアムラ・ローシヤ (Amala-kośa) や、ヘーマチャンドラ (Hemacandra) (一〇八九—一七三) のアビダーナ、チインターマニイ (Abhidhānacintāmaṇi) 類語辞典、等が人間覚醒につながっているのかどうか不勉強で未知であるので諸賢の御教示をお願いしたい。他方、日本に於ける西洋梵語学は百年に満たないが、その語学の点で科学的、

シッターとデヴァナーガリー (小島)

合理的であるので經典を読む際、大変役に立っている。例えば高楠先生はじめ榊先生の文法書、それに最近、完成した萩原先生の梵和辞典などにより、經典を解説するのに昔日、日本梵語学の資料では容易でなかったものが、或程度の成果をあげ、西洋梵語学に追いつき、或は追い越した面もあらう。勿論これは云うまでもなく二百年ほど前から欧州における比較言語学の研鑽によりマクドネルとかピッセルとかの文法書、ペーテリンクとかモニエルの辞書等のお蔭である。これら良き辞書、文法書に導かれて仏教文献の解説は実にすばらしい業績があげられた。しかし仏教文献を辞書、文法書を手引に解説するのは限界があると思う。換言すると、これらは真如の月を、あれが月だとゆびさす指の役割であり、物差しであるのみで、生命体である經典の心を読みとることにはワキ役である。この点西洋梵語学は生命にかかわりが少いのはなかるうか。前述の石垣の例ではないが外相は穴太流と現代流とは違っていないように見られるが内相は穴太流が安心である。

そこで茲に例えば江戸時代、智積院にいた、五智山、曇寂 (一六七四—一七四二) の梵文大例 (文法と字書) 十四巻、梵字通同考 (字書) 二巻、阿字門即身成仏義、一卷等々に見られる阿字本義に思いを致して見れば如何。先づ梵文大例 (智積院、常盤藏、隆瑜写) の序文に夫能没者、行水中如魚、得通人、遊

空裏如鳥、非鳥非魚能爾者何也、但能久習、而有^ニ所得^ニ故而已、焉、今也、学^ニ梵文^一者爾焉、人非西竺、法希東裔、於諸学中^ニ最為^ニ難焉、雖然輟寢忘食、以夜係昼、孜孜住心、罔敢怠遑則法爾有得耳、有人疑云、声明法不^レ渡、云何得^レ学、而有所得乎、是亦不爾、豈不言乎、真言文字、非^レ私自作^ニ非^ニ余人所作^ニ法爾常住、假火其法不^レ渡、今幸有^ニ如来加持文字^一、亦有吉勝生之釈^ニ今以^ニ法爾心^一学^ニ法爾字^一、豈无^ニ法爾所得^ニ乎、余雖^ニ不敏^一有三志於此、亦有年矣、今窃着^ニ記其所得^一者以授^ニ二三童蒙^一、汝等童蒙学而不厭、則亦当^レ有^ニ所得^一、若爾、非魚而魚非鳥而鳥者、不亦庶幾乎、嘗天文三年歲次戊午孟夏吉旦とあり、又、梵字通同考(宝島寺、寂嚴写)、上、の冒頭には再治通同考縁起として 夫阿字者、一切字之母、一切声之本也、是以於^レ行爲^レ土、於^レ色爲^レ黄、於^レ方爲^レ中、於^レ音爲^レ喉、於^レ樂爲^レ宮、於^レ藏爲^レ脾、於^レ味爲^レ甜、於^レ仏毘盧遮那、如^レ是諸法、居^ニ其中央^一統^ニ余四^一者其只阿字門乎、所以横堅諸字、悉皆歸^ニ此一字^一、稱爲^ニ第一命^一者職此之由矣、明其通同有^ニレニ^一、一者堅通、ニ者横通、a字具^ニイヤウ^一音故、イウハ爲^ニ堅通^一ニヤウハ爲^ニ横通^一是以堅通字、皆具^ニイウ^一韻、横通字、皆具^ニニヤウ^一韻初堅通者創学抄云、問ウヲ相通、其所因如何答アイウエヲノ五音中、a法爾字故無^ニ二本末^一異^ニ後四音^一隨縁字故、有^ニ二本末^一差謂^ニie^一舌内本末、u o 唇内本末、未必依^ニ本故^一e帶^ニi音^一o帶^ニu音^一是故本来互成^ニ其音^一也今云a是喉声、在^ニ内未^一顯、喉梵云揭

拏吒、是生氣之本、声響之源、内風纔^ニ起最初開^ニ口之音^一、皆有^ニ阿声^一是^ニi u^一本音、本音隨縁、而爲^ニi u^一如次舌声唇声也、謂a字触^ニ舌成^ニi音^一、触^ニ唇成^ニu音^一e i所生舌末、ā u所生唇末本来總成^ニ五音^一也、是以別^ニie^一本末、u ā本末通同、總^ニ五音^一皆互相通同也、又此五音、總有^ニ十字^一長短、爲^ニ異^一今此五音、拏短、長、故唯取短五字^ニ爲^ニ五音^一也、

因辨、a字本体、具^ニva ra^一二字、右形^ニva^一也、左形^ニra^一也、總軀是地也、va水也、ra火也也、即是有空不生三義也此三内証、即法身三密也、ba ka外用也、風^ニba^一從^ニ火^一而起、故第十六云、火必具^ニ風^一、ka爲^ニ虚空^一、空与^ニ水^一摂、故^ニba^一字中具^ニva^一字形、又闕伽明中初有^ニsa sa ra^一句、応思之、又^ニie^一是^ニba^一字、u ā即^ニba^一字、故諸文中、有^ニba^一字爲^ニi点^一義、又^ニba^一字有^ニウオ^一音^一此等深義但^ニ与^一三知者^ニ言^一而已と阿字門の展開が即身成仏義へと進んで行き、宗旨となる。そこで阿字門に生き叶字義に終始して三六の世界を道化し、六六六の国土の完成を期し、五六七の浄土を建立せんとした日本順国八宗一見の行者、神通光明、木喰明満仙人(一七二一—一八一〇)の業蹟を探索しよう。この事柄によつて我々はシツタンの真面目に触れることが出来るものと信ずる。先づ木喰上人自叙伝が誌されてある「四国堂心願鏡」を見よう。「日本順国八宗一見之行想拾大願之内本願として仏を仏師国々因縁有所にこれをほどこすみな日本千軀之内なり帰命頂礼法身阿字

一念仏法至心信広説普遍誓願事懺悔衆生法門度法界金剛諸仏
同一鉢三世淨妙自在無家木喰五行常觀心コレハ至心信常ノ本
願ナリ」と冒頭して続いて「クハンライ、コノ木喰五行菩薩
事ハ当国当所丸畑村ノ出生ナリ、中略、コレマデノ一切ノゼ
ンモアクモ、サンゲシテナニ事モ、カンニン、フンクヲ、コ
ラエテ、タガイニムツマシク、一切ニ心ヲツケ至心、信心ノ
心サシヲ、ヲコスニライテハ、ムラ講中モアンゼンナル事ヲ
エテ、所モハンジヤウ福德円満ナル事、ガンゼンナリ、タト
エマツセマデモイタルトモ、ユイツタエ、信心ノ心サシヲ、
ヲコスヘキモノナリ ツブサニハノブル事アタハス

木喰五行信願の件

○カウ中ノ心もこゝに丸ばたけ十三ぶつの心なりけり ○
みな人の心ごゝろを丸ばたけかど／＼あればころげざりけ
り ○みな人の心のぐちはいらぬものふじやうけがれとお
もへ人々 ○みな人の心をまるくまん丸にどこもかしこも
まるくまん丸 ○みな人の心ごころをさんげせよ神と仏も
いさみまします ○みな人はこのよばかりをたのしみてま
たくるはるはなにをくふべき 中略
天一自在法門 木喰 出所ハ当所ナリ 五行菩薩（花押）八
十五歳。又、甲州善光寺弥陀如来画幅心願文には「日本順国
八宗一見之行者十八大願之内本ぐわんとして仏を仏師国々因
縁ある所にこれをほどこすみな日本千体之内なり日本しま

／＼修行すること今年まで七十五年心ごゝろの中に住す 帰
命頂礼法身阿字、一念仏法至心広説普遍誓願事懺悔衆生法門度
法界金剛諸仏同一鉢三世淨妙自在無家無我木喰明満仙人 常
觀心 ○木喰の衆生さいどはなにやらむ たゞかんにんが修
行なりけり、中略 ○木喰のかたみのふでもなむあみだかえ
すがえすもなむあみだ仏、文化五辰歳三月廿一日コレヲカ
ク 九十一歳、神通光明 木喰 明満仙人（花押） 以上、
木喰上人は常觀心という宗教的実践門に立つて千鉢仏を刻
み、絵像を画き、名号を本尊とし社会的実践門を生産されて
行かれた模様である。しかもこの無我の宗教的実践が弥勒淨
土の立替えとして実現したものである。木喰上人が雨の日も
風の日も日本国中を歩み続け、千鉢仏を刻み続けた上人の姿
は外ならぬ五六七仏の姿そのものではなからうか。宜なる
哉、五十六歳、安永二年（一七七三）上人が日本廻国の大願を
発し、二月十八日相模国、伊勢原を立、各地の名山、社寺、
坂東、秩父、西国の觀音札所、各国の一宮、国分寺八幡等に
納経、満願まで二十七年間廻国をつづける。実は上人の奉納
された「大乘妙典、梵字納札」には最下段のところに今皆六
十六歳懺悔と書かれて安永二年二月十八日出とあり。思うに
五十六歳にしてミロク淨土建立を発願し、六十六歳にて建立
を成就したと考えられ、尚、六という数を言霊からすると燃
える姿であり、火でもあるので上人は念々称名常懺悔と二百

余年前にも仏像を刻み、現在も書き、未来へも書き続けておられるものと信ずる。その姿を五輪塔婆の形で刻まれた「大乘妙典、梵字納札」に見る。

先づ五輪の中、火、風、空大に見られる梵字を読むと、中央に南无 *kha ha ra va a* と五大の種子を書き空大のところ、外輪に頂点より右左に順次に振り分けて十三仏の梵字種子が記されている。即ち *hām* (不動) *ḥaṇ* (釈迦) *ṇaṁ* (文殊) *aiṇ* (普賢) *ḥa* (地藏) *ṇu* (弥勒) *bhai* (薬師) *sa* (観音) *ḥiṇ* (弥陀) *hān* (阿閼) *van* (大白) *trān* (虚空) である。しかも梵字 *kha ha* の両側に兜率内院(右) 弥勒如来(左) と書かれてある。この弥勒に注目したい。次に梵字 *ra va a* の右側、梵字 *om ma ni* の外側に *om mai tre ya a svā ha* (唵 恒哩野阿婆囉訶) なる弥勒菩薩真言を誌してある。続いて水大の円形中、外側円には中央下より光明真言を右施転して書いてある。即ち *om a mo gha vai ro ca na ma ha mū tra ma ni pa dma iṇa la pra va rita ya hūn* (唵 阿謨伽尾嚩左義摩賀母捺囉麼尼鉢囉鉢囉嚩野吽)。そして内側円に(阿吽) *a hūn* (大日) を中心に四方仏を画いている。即ち東方に *hūn* (阿閼) を、南方に *ṇu* (弥勒)、(普通は *trān* (宝生) であるが) を、西方に *ḥiṇ* (弥陀) を北方に *bhāṇ* (釈迦) を安置してある。この弥勒は胎藏界曼荼羅では中台八葉院の東北方、蓮華座におられる菩薩であるが、釈迦如来の補生の菩

薩として今猶、兜率天にいて未來庵華菩提樹下大悟の曉に如来として人間世界に出現される聖格である。ともあれ上人は五輪塔の地大に示されてあるように上人がみろくの名代として三界無庵で家を持たず、木喰として自然食をいただき、神社、寺々に参詣、学問は八宗兼学を修得し、天一自在広説法門という自由自在の智慧を獲得、老妣、父母の恩を感じつつ、五行菩薩として千駄余の木像、絵像、名号を縁あるところに奉納されたものである。上人の「懺悔経諸鏡」中の光明真言を梵音にて記した次に「*a* コノ一字ヨリ、シャバ一切ノ事、ハジマリテ、キメウノシャバセカイナリ、スナハチ光明遍照十方世界ナリ、ナヲ又八万四千ノ経々モ皆コノ一字ヨリ、イズルナリアルイハ、ヨミチナツスルトキハ、ナンヲノガレ、サメシカラズ至心信ニキメウ奉ルベキモノナリ」とあつて、上人が如何に阿字本義を体得されて行動されたかがよくうなずかれる。換言すれば無我即浄土と行じて即身成仏の実踐行を断行したものと云えよう。そこで這般の事情を弘法大師の「即即成仏義」には始めに即身成仏の経証をあげ、次に論証を示し、続いて即身成仏の字義を釈して「六大無礙 常瑜伽 体四種曼荼羅各不離 相 三密加持 速疾顯 用 重重帝網 名 三身 無礙法然具足薩般若 心数天王過三利塵 各具三智無際智 円鏡力故実覚智 成仏」中略 彼種子真言曰 *a vi ra hūn khaṇ hūn* 為阿字諸法本不生義者即是地

大、囀^{ナリ}字離言^{トイフハフ}説^ヲ 謂^ハ之^ニ水夫^ト大^ト 清淨無垢^ト塵^ト 是則囀^{ハレ}字火大也、
 因業不可得^ハ者、詞字門風大也、「等虚空」者、欠^ヘ字、字相即^{ナリ}空大也、
 我覺^{ナリ}者、識大^{ナリ}中略 a 阿字第一命^{ナリ} va 囀^{ナリ}字名^ヲ為^{ケテ}水^ト、
 名^ヲ為^レ火^ト、ha 咩^{ナリ}字名^ヲ為^レ風^ト、lha 佉^{ナリ}字同^ニ虚空^ニ中略 謂^ハ、
 「金剛輪」者、阿字、阿字即^{ナリ}地、水火風如^ハ文^ヲ可^レ知^ス、「円壇」
 者、空、「真言者」者、心大也、中略 法然具^ニ足^ニ薩般若^ヲと a
 字の解明が中途半端で終つたかの感がないではない。しかし
 よく考へて見ると即身成仏の a 字門は英訳「即身義」(稲垣久
 雄訳)——一九七五、四——の序文にも指摘がある「即ち身成れる
 仏」「身に即して仏と成る」「速やかに身、仏となる」の三義
 の中、principle of Attaining Buddhahood with the Present
 Body である。私に思うに阿字のうらが咩字であり始終全う
 じて無我即浄土が顕現され、ここに私の安心が成就されるも
 のである。従つて只今ここで日本梵語学の再検討が所望され
 る所以である。

執筆者紹介(一)

- | | |
|--------|----------------------|
| 前田 恵學 | (愛知学院大学教授・文博) |
| 藤田 清 | (四天王寺女子大学教授) |
| 宮本 正尊 | (東京大学名誉教授・東洋大学講師・文博) |
| 小島 通正 | (龍谷大学教授) |
| 出雲路 暢良 | (金沢大学助教授) |
| 渡辺 芳遠 | (熊野工業高専助教授) |
| 田村 完誓 | (立正大学助教授) |
| 藤吉 慈海 | (花園大学教授) |
| 関口 真大 | (大正大学教授・文博) |
| 佐藤 哲英 | (龍谷大学名誉教授・文博) |
| 結城 令聞 | (京都女子学園園長・文博) |
| 中村 元 | (東方学院長・文博) |
| 鈴木 斌 | (東京外国語大学教授) |
| 森 祖道 | (城西大学助教授) |
| 定方 晟 | (東海大学助教授) |
| 静谷 正雄 | (龍谷大学兼任講師) |
| 佐藤 達玄 | (駒沢大学教授) |
| 田中 良昭 | (駒沢大学教授) |

(一七九頁につづく)